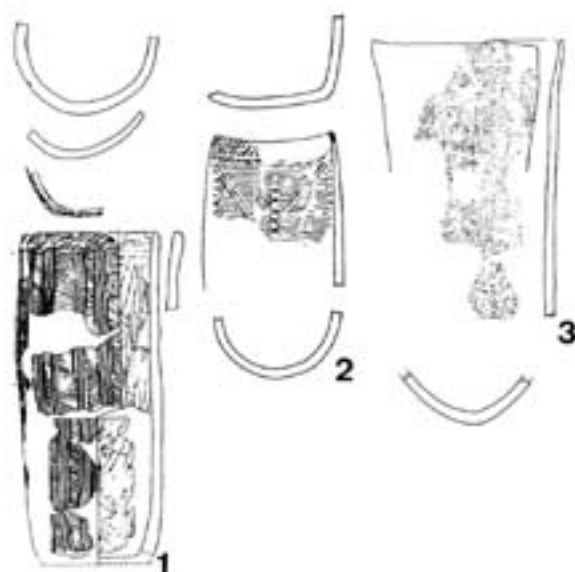


のものクサビ形状のものがあり、吉田式土器の段階になると粘土様状のものは見られずにクサビ形状のものでより密接していくという特徴がある。さらに、この密接するクサビ形貼付文は、実際に貼付するもの他に、刺突文などによって貼付文を表現しているものがあり、この点に関しては、吉田式土器の細分を行った河口（河口 1989）や新東（新東 1989）も指摘している。レモン形においても両者が確認されており、このことから吉田式土器の後半すなわち岩之上段階<sup>11</sup>までは3つの器形の組み合わせが成立していたものと考えられるのである。

この他に、岩之上段階のものとして、西之表市日守遺跡では2種類の波状口縁が出土している。これは、吉田式土器の段階になって角部形成という概念が急速に崩壊し始めることを示唆していると考えられる。この要因は何であろうか。角筒形の発生が、口縁部に「角」を設けることに端を発し、装飾性が徐々に高まり角部形成が華麗なものへと変遷したとするならば、装飾性の追求が終わり、また、実用の面でも角部形成を必要としなくなったために起こった崩壊現象として捉えることが出来るのではないだろうか。これは、吉田式土器における角筒形の個体数の減少からも想定できると思われる。なお、倉園B式土器においては、角筒形は確認されていないことから、現時点における円筒形・角筒形・レモン形という器形の組み合わせは、吉田式土器の岩之上段階までは存続していたことがうかがわれ、波状口縁に関しては吉田式土器の岩之上段階で発生していることが指摘できるのである。



第3図 上角下円筒を呈する資料

#### 4 南九州貝紋文系土器の組合せに関する覚え書き

南九州貝紋文系土器の組み合わせに関しては、レモン形も含めて解決しなければならない課題が多い。これらの器形はそれぞれ密接な関係にあり、例えば口縁部のみ角部を形成し、胴部においては角部を形成しない資料の存在も既に指摘<sup>12</sup>されている（第3図）。その結果、角筒形であっても円筒形に分類されてしまっているケースも存在する。これは、三者の関係が単純に理解・解決されるものではないことを暗示していると共に、資料化する段階での入念な遺物観察が求められるものと理解したい。現に、円筒形と角筒形のセット関係についても具体的に論究されたことは少なく、両者の比率に関しても漠然としたものでしかないのが現状である。今後、この南九州貝紋文系土器の研究を進めていくにあたり、自分なりの問題意識を覚え書きとして記しておきたい。

まず、全ての事項に共通する基本的なことであるが、資料の観察が挙げられる。これまでのように円筒形が角筒形かではなく、判断が難しい場合や不自然な横断面が見られる場合には、何らかの表現を用いて区別する必要がある。この場合、レモン形を呈する資料である可能性も考えられる。内面調整に関しては、円筒形の場合には口縁部の内面調整は横位を基本とするものであるが、角筒形やレモン形の場合、角部へ向かう斜位の調整痕が見られる。この特徴を観察することで、破片であってもある程度器形を推察することが可能である。

次に、前平式土器の細分を行う必要がある。先に述べたが、角筒形やレモン形の発生が前平式土器に求められる以上、前平式土器には円筒形のみが段階が存在しているものと思われる。この前平式土器のどの段階で角筒形が発生したかという問題は、角筒形という極めて地域色の強い土器が、南九州内で発生し変化していったことを裏付けると共に、南九州の地域性を考える上で極めて重要な問題となるのである。

次に、倉園B式土器・石坂式土器の波状口縁に注意を払いたい。一見、器形の組合せとは何の関係も見いだせないかもしれないが、石坂式土器には4つの波頂部を有する口縁部と2つの波頂部を有する口縁部、それに平口縁を呈する口縁部の三者が確認されている。吉田式土器の岩之上段階の資料にも、この三者が良好な状態で出土している例もあることから、円筒形・角筒形・レモン形という三者の関係の延長線上で論じることが可能と考えるからである<sup>13</sup>。また、報告されている資料によっては、波状口縁ではあるが波頂部が2か所であるのか4か所であるのかはっきりとしないものもある。特に小破片での区別が困難であり、2種類の波状口縁があることを意識して分類及び表現をおこないたい。

さて、石坂式土器には瘤状突起が付くものがあり、前迫亮一によって石坂式土器新段階に位置づけられている（前